

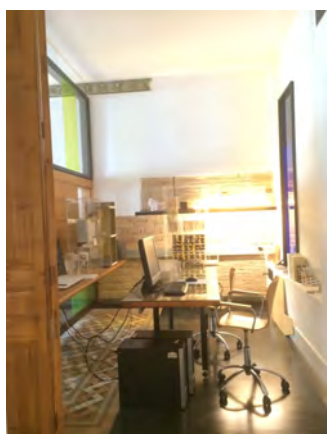
1. 研究目的

スペインのバルセロナは、ローマ帝国やイスラム、フランス、マドリッド政権による支配と自治とを繰り返し、独自の文化を発展させてきた多文化都市である。バルセロナの伝統と革新を同等に重んじる風習が生んだリノベーション建築には、古い建物や新築の建物には感じられない空間のダイナミズムがある。今日、日本の都市では人口に対して建築が飽和状態になっており、リノベーションはこれから欠かせないテーマになると考えられる。そこで、東京と似た多文化都市であるバルセロナの建築空間で、“新”と“旧”が如何なる手法で化学反応を起こすのかを研究する。同時に、新旧のみならず、バルセロナの建築でよく見られる“自然と人工物”、“対の色彩”など、対概念の融合によって生まれる空間について調査・分析する。

2. 活動概要

活動期間は、2016/1/29(金)～2016/3/13(日)。うち、インターンシップ期間は 2/1(月)～3/11(金)の計6週間。

スペイン・バルセロナの有名建築家である Miguel Roldán, Marce Berengué 夫妻が主催する建築設計事務所、Roldán + Berengué, arqts. (住所)にてインターンシップを行った。勤務時間は、月～金曜の 9:00～20:00。仕事内容は、主にグラフィック製作、模型製作、建築パース製作、ミーティングへの参加、現場見学、Barcelona Architecture Center が主催する学生向け建築プログラムの手伝いである。仕事の合間に、所長さんによる学生向けレクチャーや、バルセロナ市内の有名建築家の設計事務所見学などにも参加することができた。当事務所はコンバージョン(古い建物を用途改変して改築する)建築の設計を得意としており、今回私が担当した仕事もすべてコンバージョンの計画であった。



事務所内の作業スペース



“BOMBERS”現場見学



作成した建築パースの一つ

また週末を利用して、バルセロナ新市街・旧市街、カタルーニャ地方オロット市でフィールドワークを行った。フィールドワークを行うにあたり、「新旧」「自然と人工物」「異色彩」「異素材」「光と影」という対概念を意識してそれぞれの建築を観察した。訪れた建築は 30 以上にのぼる。



川のパビリオン(RCR/オロット)



市場に並ぶ野菜・果物



バルセロナ・パビリオン(ミース・ファン・デル・ローエ)



サグラダ・ファミリア聖堂(アントニ・ガウディ)

3. 研究結果

インターンシップにおいては、リノベーション建築やコンバージョン建築について大いに学び、考えることが出来た。そこで感じたのが、「新」と「旧」は対概念ではないということである。リノベーションの考え方として、「すべての物事は過去に終わるのではなく、今につながっている」というものが前提にあるのだということを発見した。時の流れによって歴史が積み重なるように、建物もレイヤーを重ねるように更新していくのだということ、大変考えさせられた。また、バルセロナでは自分の家や店舗をDIYでリノベーションするという事例も多く見られる。古いものと新しいものを融合させることで新しいものを作る、というよりも、建物の歴史を重ねていくという概念がバルセロナの街に根付いている証拠である。またフランスやイタリアが「保存」の文化であるのに対し、バルセロナが「更新」の文化であるということも、この概念に関わっていると考える。先に述べたように、バルセロナを含むカタルーニャ地方は様々な国からの支配と自治とを繰り返し、様々な変化を経験したという歴史的背景がある。その経験こそが「更新」の概念を生み出したのであろう。

またフィールドワークを通して感じたのは、歴史や風景、当たり前の日常が建築に大いに反映されているということである。例えば沢山の建築に見られる豊かな色彩は、市場にあるカラフルな野菜や果物、真っ青な空や海、レンガ造の建築の赤色を彷彿させる。あるいは「森の中にある鉄板の建築」と聞くと、はじめは不自然な人工物のような想像を抱くが、実際に訪れると、その土地の火山や岩山のような自然の荘厳さ、ダイナミズムを感じる。これらの経験から、建築設計をするにあたって、その土地の歴史や風景、日常生活を知ることが如何に大切であるかを、身にしみて感じた。

4. 謝辞

最後に、このような貴重な経験をするにあたって援助をしてくださりました湘南藤沢学会に、心からの感謝を申し上げます。